

## 徹底追究 社会科における「深い学び」①

# 子どもの姿にみる「深い学び」

岸野存宏（東京学芸大学附属世田谷小学校）

## 1. はじめに

文部科学省が平成28年8月に示した「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、アクティブ・ラーニングの視点での授業改善と、「主体的・対話的で深い学び」を授業の中で実現していくことが求められています。

ここでいわれる「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなものでしょうか。「主体的」とは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」こと、「対話的」とは、「子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」こと、そして、「深い学び」とは、「自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりする」とことと示されています。そうした子どもの姿を実現していくために、実社会や実生活に関連した課題などを通じた、社会参画を視野に入れた実践がいつそう求められるでしょう。では、具体的にどのような子どもの姿を実現することなのか、私なりに考えてみたいと思います。

## 2. 私の考える「深い学び」

### (1) 「深い学び」とは、知識ではなく過程である

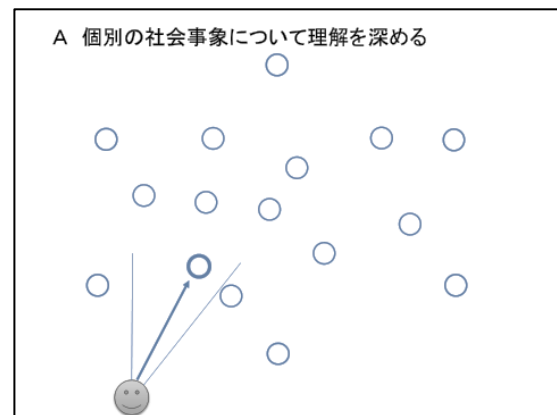
学習前に持っていた既存の知識や技能、あるいは学習を通じて得られる個別の知識が概念等に関する知識へと変化したり、概念等に関する知識が広がりや変化を通して、他の事実や概念とつながったりするような学習が行われれば、結果として

その事象への理解はより詳しく深いものになるでしょう。

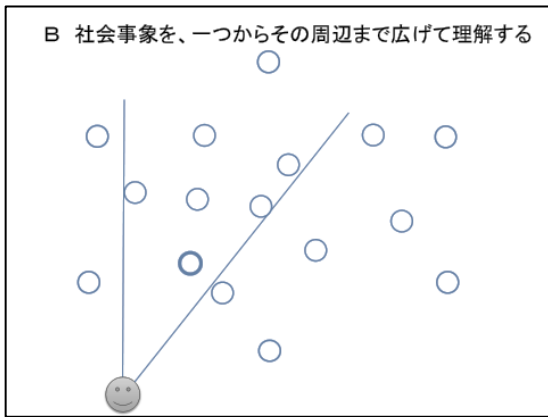
しかし、その事象に対する詳しい知識や深い理解と「深い学び」はイコールではありません。「深い学び」とは、「社会的な見方や考え方を、習得・活用・探究を見通した学習過程の中で働かせながら思考・判断・表現し、見方や考え方を更に成長させながら、資質・能力を獲得していくこと」であるとされます。つまり、「深い学び」とは、結果として得られた知識や技能を指すのではなく、「学習活動を通して、資質・能力が獲得されていく過程」を指しているのです。

### (2) 社会科の授業における「深い学び」

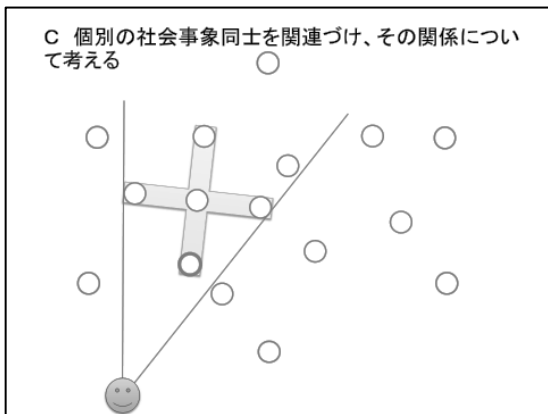
社会科の授業では、まず一つの資料に注目することから始まる場合がよくあります。当然、そのものについて詳しく知ろうとすることになるので、この時点で子どもは、周辺にあるその他の事象との関係はまだ見えていないか、そもそも他の事象は目に入っていない状態です。【図A】



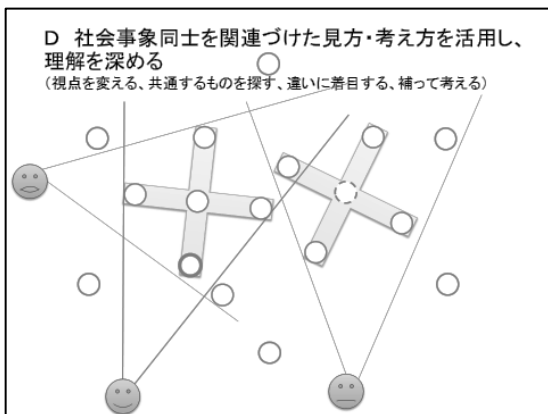
しかし、学習が進み、社会事象への興味・関心が高まってくると、その周辺の社会事象へと視野が広がっていきます。【図B】



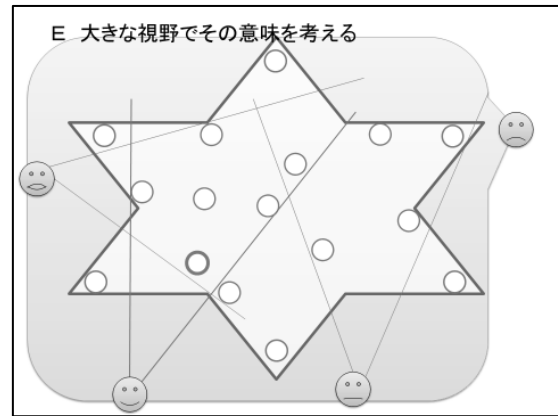
そして、そうした社会事象同士の関係について考えることで、社会事象の意味や関連が見えてきます。【図C】



そこで見出した社会事象同士を関連づけた見方・考え方を活用しながら、他の視点で見直してみたり、共通するものを探したり、違いに着目したりすることで、理解を深めていきます。【図D】



さらに、大きな視野でこれまでの学びを捉え直すことなどを通して、社会事象の意味や価値を考えるといった深まりへと進んでいきます。【図E】



ここでは、AからEそれぞれを経験することが目的ではなく、また、A、B、C、D、Eという順序を踏むことが大切なわけでもありません。子どもの興味・関心に基づき、BからCへ、DからEへなど、社会事象の理解の仕方を変化させながら見たり考えたりするという過程を経験することが大切なのです。そして、この過程を経験しながら「概念等に関する知識」を獲得していくことが、「深い学び」であると考えられます。

### 3. 実践紹介

#### —4年「わたしたちのくらしと水」を例に—

次に、実際の授業の様子から、「深い学び」について考えてみたいと思います。

#### (1) 本単元の価値

本単元は、人々の生活を支える組織的な働き、つまり公共事業の働きとその価値について考える単元です。具体的には、公共事業の働きの仕組みや自分たちの生活とのつながり、社会全体への貢献等について考えていくこととなります。

このとき、仕組みの理解はもちろん大切ですが、「深い学び」を実現するためには、もう一歩先を考える必要があると思います。そこで、未来における理想としてどうなることがよいのか、そのために自分はどのように関わっていけるのか、これらについて考えていくことにしました。

単元計画時に考えていたのは、以下の二つです。

- ①ペットボトルに入った「きれいでおいしい水」

が販売され、水道水を飲まない人も現れている  
今、水道水の役割は何か。

②浄水処理技術の向上によって、原水が汚れてい  
てもきれいな水道水をつくり出すことができ  
れば、社会に求められるまま、多大な費用をかけ  
て大量の水道水をつくる状態が続いてよいのか。

①について考えていくことは、「誰にでも、安価  
できれいな水を供給している水道事業の価値」、つ  
まり公共の働きとしての水道事業の価値について  
考えることとなります。

②を考えることは、大量に資源を消費する社会  
のあり方について、それがどこまで必要なのかを  
見直すこととなります。

そして、こうした問いに向き合うことが、自分  
自身や世の中のあり方を考え、「深い学び」を実現  
していくことになると考えました。

## (2) 「つかむ」「調べる」「まとめる」の段階

本単元は、水道水とミネラルウォーターの飲み  
比べから始めました。生活の中にある水について  
興味を持たせることをねらった活動です。当初、  
子どもたちは「水道水はおいしくない」というイ  
メージをもっていました。水道水とミネラルウォ  
ーターを実際に飲み比べて味の違いがあることを  
知ったり、同じ水量でもそれぞれの価格に違いが  
あることを資料から捉えたりしていきました。

水道水とミネラルウォーターの違いに興味を持  
った子どもたちは、①自分たちの使っている水量  
の実態調査、②水の価格の違いとミネラルウォ  
ーターを使う理由の調査、③水がきれいになる仕組  
み（自然による浄水・浄水場・浄水器）などを調  
べていきました。

①、②の活動の特徴は、子どもたち自身が家の  
人にインタビューしたり、店に見に行ったりする  
など、主体的に取り組める活動であり、子どもた  
ちは自ら調べたことを発表する楽しさを実感でき  
ます。③については、教科書などの資料を丁寧に  
読むことの大切さが実感できる活動になっていま  
す。

次に、浄水場を見学し、自分たちの飲んでいる

水がどのように届いているのかについて調べまし  
た。そして、きれいで安全な水をつくり出すため  
に、薬品を使ったり、多くの検査を行ったりする  
などの工夫や仕組みがあることを学びます。水は  
大切に、という言葉がこれまで見聞きしてきた子  
どもたちにとって、その背後にある人々の姿が見  
えてきた場面ではないでしょうか。

この見学でもう一つ、子どもたちの心に残った  
のは、これまで使われてきた、砂地にゆっくりと  
浸透させて水を濾過する方法（緩速濾過方式）は、  
消費量の拡大によって給水が追いつかなくなり、  
使用を取りやめてしまうという事実でした。

どうしてこの事実が、クラスの子どもの心に  
残ったのでしょうか。それは、単元の前半で学  
んだ、水がきれいになる仕組みに出てきた話とつ  
ながったからです。このとき、T君の「熊本の水  
道水はおいしい」という発言をきっかけに、その  
水がおいしいわけを調べていきました。阿蘇山の  
火砕流の地層を通り抜けながら、自然の濾過作用  
によってつくられる水のよさを実感した子どもた  
ちは、緩速濾過方式に自然の濾過作用と同様のよ  
さを感じたのです。その濾過方式がなくなるのは  
子どもたちにとっては残念な事実であり、そこか  
ら「緩速濾過方式が増えるためにも、水を汚さな  
い、無駄にしない取り組みをしていこう」という  
話になっていきました。

これが本単元で、子どもが未来において、どう  
なることがいいのかを考えるきっかけ、すなわち  
「深める」段階に入っていくきっかけとなった場  
面です。「深める」段階の学習をよりよく実現して  
いくためには、単元の前半から、子どもたちには  
ある事実についての「よさ」（ここでは自然の濾過  
作用）を感じさせておくといよいでしょう。その後  
の展開の中で、教師がその「よさ」を想起させたり  
関連づけて考えさせたりすることで、子どもた  
ちは自然と「深い学び」へ向かうようになります。

## (3) 「深める」段階

### ① 本単元で「深い学び」を実現するために

これまで、社会参画という視点から、「自分た  
ちにできること」を考えたり、もっとよくなるた

めの方法を提案したりすることは、行われてきました。しかし、お題目や机上の空論に終始してしまったり、子ども自身の生活に反映されなかったりするといった課題がありました。そこで、実際に行動し、その経験を振り返ることを通して、「飲料水の確保」という事象をより広い視野から捉え直したいと考えました。

ここでの指導のポイントは三つです。

- 1 具体的な活動内容を明確にする
- 2 始める前に、やれそうかどうかを考えさせる
- 3 記録方法を提示し、その記録を提出させ、事前に把握する

授業では、「水を無駄にしない、汚さない取り組みをしていこう」としている子どもたちに、具体的に何をするのかを問いかけました。

そして、水を無駄にしないための具体的な取り組みについて東京都水道局のパンフレット等を使って調べ、そこでわかった以下の事からを実践していくことにしました。【ポイントの1】

- ・歯みがきをするとき、コップに水をくむ
- ・お風呂の残り湯を使う
- ・お風呂のシャワーはこまめに止める
- ・醤油はちょうどよい量を使う
- ・みそ汁を流しにすてない
- ・牛乳を流しにすてない
- ・油を残さない（肉や魚の油、ドレッシング、ラーメンのスープ…）
- ・お米のとぎ汁を流さない
- ・野菜のゆで汁を再利用する

そこで、これらを次の授業までの1週間、自分たちで取り組み、結果を次の授業で報告し、そこから「本当に『水を汚さない、無駄にしない生活』ができるか」について話し合うことにしました。子どもたちは、「普通にすればできるはず」「いつもお母さんがやっているけど、自分にできるか心配」など、新たな活動への期待と不安の声が出てきました。【ポイントの2】

取り組んだ結果は日記形式で記録し、それを毎日提出してもらうようにしました。【ポイントの3】

## ② 子どもの感想に見る「深い学び」

提出された子どもたちの日記からは、自分の経験をもとに、子どもたち自身の見方を広げ、「深い学び」を実現している姿が多く見られました。

その一部を次に紹介します。

**Aさんの感想(抜粋)** ポン酢を流しに捨ててしまいました。(>\_<)やっぱりなれないとやっちゃいます。

→水を汚さないために大切な取り組みと考えている事象と、実生活での行動が徹底しきれていない事象とを結びつけ、実践の難しさを実感している。

【図C】の視点(個別の事象同士を関連づけ、その関係について考える)に類する。

**Kさんの感想** 家では合成洗剤じゃなくて石けんを使っている(合成洗剤は水を汚染するので、生物が死んでしまう)。お風呂の水だと汚れていて、洗濯物の汚れが落ちないので、洗濯では残り湯は使っていない。

→残り湯を使って洗濯する場合、洗い物の汚れをしっかりと落とすために合成洗剤を使わざるを得ないが、合成洗剤の使用は水の汚染につながってしまう。一方、石鹸を使う場合は、きれいな水を使わざるを得ない。石鹸ときれいな水を使う自分の家の洗濯の仕方また、水を汚さない取り組みであることを発見している。

**Mさんの感想** レタスとキュウリを洗いました。生で口に入るのででいねいに洗いたいので、あまり節水は出来なかった気がします。

**Hさんの感想** 油(ドレッシング)が余ったから飲もうとしたら、お母さんに「やめて。」と言われました。なるべく内緒で飲むようにしている。関係ないけど、18日にカップラーメンを食べたとき、スープは全部飲んだ。

→使った水の排水処理方法に注目してきたこれまでの取り組みとは異なり、子どもらしい視点から、「水を汚さない・無駄にしない取り組み」の価値について考えている。【図D】の視点（社会事象同士を関連づけた見方・考え方を活用し、理解を深める）が見られる。

こうした一人ひとりの経験をもとに、次時の授業へと進みました。

### ③ 授業での姿

「水を汚さない、無駄にしない生活」に1週間チャレンジした後、いよいよその結果を述べ合う授業です。②で紹介したような経験をもとに、「忘れてしまった」「面倒だった」「とぎ汁を捨てる庭がない」など取り組みの難しさを感じたという意見と、「簡単だった」「やったらできた」「続けられそう」という意見と、二つの立場の意見が出されました。どちらかといえば、肯定的な意見が続かなかつてS君は、「面倒だからやらなかった」と発言。しかし、「面倒だから」という言葉に周囲が反応する様子を感じ取ったのか、S君は「でも2日目はやったよ」と言葉をつなぎます。後から考えると、この発言の意図をS君に尋ねていればよかったと思います。そうすることで、S君の内面の変容に迫れたかもしれません。

その後、今度はY君が、「最初は大変だったけど、習慣にしていけばできる」という発言をしました。一見、面倒なことも、習慣にしていればできるのか、また習慣にすることができるのか、子どもたち一人ひとりに新たな問題として突きつけられた発言でした。

### ④ その後の取り組み

この授業の後、一旦この単元は終了したのですが、「総合的な学習の時間」を使った学級での活動として、「水を汚さない、無駄にしない生活」を世の中に広げていく取り組みは続いていきました。

例えば、本校では給食に瓶入りの牛乳が出ます。

この牛乳は業者に瓶を返却する関係で、残した牛乳は下水として流されてしまいます。自分たち

の残した牛乳も下水管や水再生センターに負担をかけていることを知った子どもたちは、児童朝会で、全校に「牛乳を残さず飲もう」と呼びかけ、さらに1週間後に廃棄量がどれくらい減ったのかを再び朝会で報告しました。

また、自分の住んでいる集合住宅の管理組合にお願いして、公園の水道にポスターを貼ってもらった子どももいました。

学校での学習が終わった後、どれだけ子どもの生活に影響を与え続けられるか、このことも「深い学び」が実現できたかどうかを考えるヒントになるのだと思います。

## 4. 終わりに

### —S君の姿から考える「深い学び」—

本実践の導入時の水の飲み比べの場面で、「水道水はまずいんだよ」と叫んだS君。その後の、「緩速濾過方式を増やした方がよいか」の場面でも、いったん汚れてしまった川の水は、努力してもきれいにすることはできない、だから原水がきれいでないと難しい緩速濾過方式を増やすことに賛成できない、という立場を貫いていました。また、環境に対する取り組みを考える授業では、「おじいちゃんは生ごみを庭に埋めている、でも、自分は汚いからやらない」と発言していました。

振り返って考えると、S君は、自分の力によって、何かが変わることについて、積極的なイメージを持てていなかったのかもしれません。しかし、学年末、各自が「水を汚さない、無駄にしない生活」を世の中に広げていく取り組みをしてきた後で、最後にもう一度、「水を汚さない、きれいにするために大切なこと」を話し合ったときには、「一人ひとりでは効果がないから、たくさんの人にやってもらう」と発言をしていました。「自らの力だけでは何かを変えることはできない」という基本的な考えは変わらないかもしれませんが、それを前提にしつつ、あらためて可能性を探ったのだとすれば、この過程の経験は、S君にとって「深い学び」になったといえるのではないのでしょうか。